

ドイツのエネルギー転換 と キリスト教

木村護郎クリストフ
(上智大学)

1. 福島第一原発事故後のドイツ政府の反応

倫理委員会報告書『ドイツのエネルギー転換
未来のための共同事業』
「脱原発が10年以内に完了できるようにすべき」

←「原子力事故が、日本のようなハイテク国家において生じたという事実である。これにより、ドイツではそのようなことは起こり得ないという確信は消失した。このことは事故そのものについても言えるし、また、事故収拾の試みが長期にわたって手の出しようがないことについても言える。」

報告書の内容より

- (1) 原子力発電所の安全性が高くても事故は起こりうる。
- (2) 事故が起きると他のどんなエネルギー源よりも危険である。
- (3) 次の世代に廃棄物処理などを残すことは倫理的問題がある。
- (4) 原子力より安全なエネルギー源が存在する。
- (5) 地球温暖化問題もあるので化石燃料を代替として使うことは解決策ではない。
- (6) 再エネ普及とエネルギー効率化政策で原子力を段階的にゼロにしていくことは将来の経済のためにも大きなチャンスとなる。

2. 倫理委員会とは？

倫理委員会の役割

- ▶政策の方向付けよりは合意形成の手段
- ▶科学技術のシヴィリアン・コントロール（非専門家統制）の一形態としても位置づけられる

※非専門家統制：「科学的事実や証拠だけでは結論の出せない事態に対して、社会的意思決定によって科学技術をコントロールするもの」（山村2013:24）

吉田文和、ミランダ・シュラース 編訳 (2013)
『ドイツ脱原発倫理委員会報告』 大月書店
ミランダ・シュラース「日本の読者のみなさんへのメッセージ」

倫理委員会の伝統と役割

「特定の政策や経済的選択にともなう倫理的次元の問題が、キリスト教会やNGOなど社会団体や政党、そしてメディアによって充分検討されなければならないということが、ドイツ社会では、よく受け入れられているのです。これはおそらく、ドイツの文化を背景にしているもので、政策に充分な倫理的配慮をとまわなかったドイツの暗い過去の教訓から出発していると思われる。」

「ドイツでは原子力の倫理的問題について、もっと以前から長い議論がありました。その議論は少なくとも過去40年以上続いてきたのです。したがって、私たち「安全なエネルギー供給に関する倫理委員会」は、原子力エネルギーに関連した数多くの倫理的問題に、あらかじめ深く立ち入る必要はありませんでした。これらはすでにドイツの教会や環境グループ、平和運動家、学校、地方・州・連邦レベルの各議会で、長らく議論されてきたのです。」(8)

ヨアヒム・ラートカウ+ロータルハーン (2015)
『原子力と人間の歴史—ドイツ原子力産業の興亡と自然エネルギー—』
(山縣光晶+長谷川純+小澤彩羽訳) 築地書館
「日本語版への前書き」

「ドイツにおける[脱原発の]展開から次のことが見てとれます。抗議デモだけでは十分ではない、学者や政治家、ジャーナリスト、そして、**教会の代表者たちとの関係もきわめて重要である**、と。」(vi)

→ 抗議だけではなく、建設的な対話が重要

3. 対話の場としての信徒大会

教会大会の自己理解

「教会大会は**キリスト者が社会に介入**することを支援します。何が正しくて何が誤っているかを指示するのではなく、境界線や対立点をこえた、開かれた、ときに**論争的な対話**に招きます。こうして教会大会はドイツ社会において他に例をみない自由な意見交換の場になったのです。」（強調は原文）

(<http://www.kirchentag.de/das-ist-kirchentag/das-ereignis/in-der-gesellschaft.html>)

大災害の確率

4. 原子力の倫理的評価

「将来起こりうる大災害の確率度は重要ではない。確率度とは、未来の出来事に対する主観的評価である。ある出来事が起こるとき、起こる以前の時点において、その出来事がどれほど蓋然的であったかどうかは、どうでもよいことである。（...）決定的なのは、利益と損失に関わる者が同じだということである。（...）しかし、よく知られた固定数の人々が、全く問題とされない他人のリスクを犠牲にして、利益を上げるようなことは、決して許容されてはならない。ここでの確率計算は場違いである。」（シュペーマン2012:38-39）

→ 都会のために田舎を犠牲にすることは許されない
「僻地」に作る時点で安全ではない原発

放射性廃棄物の問題

「貯蔵されている放射性廃棄物に対する十分な安全対策の指摘も価値を持たない。核分裂のエネルギー産出の潜在的な有害性は、千年以上も残り続ける。（...）追加のエネルギー源なしに我々の経済システムは維持されえないだろうこと、そして、消費制限がおそらく制御できない社会的摩擦を生み出すという指摘がなされるだろう。しかしこの指摘は、今後三〇年間、我々の消費を制限したり、我々の社会システムを修正する必要がないよう（...）我々が作り出した新たなリスクの根源を制御できる社会システムをつくるよう、何千年にもわたり将来世代に強いることを意味している。しかしこの不当な要求は、いかなる仕方でも正当化できない。」（シュペーマン2012:39-40）

→ 現在世代のために後の世代を犠牲することは許されない

背景：
エネルギーを「究極的なもの」にしない

エネルギー政策におけるモラル

「ここには多くの心理的な障壁がある。しかし自らの信仰を留保しないからこそ、キリスト教徒は他のすべてを留保しうる自由や、他のすべての絶対的なものを相対化する自由を得るのだ。」

（シュペーマン2012:61）

西ドイツのカト・プロの共同声明(1989)

原子力の非軍事利用の倫理的評価について諸教会（およびそれをこえて）合意がひろがりつつある：

・ 現在導入されている原子力利用は重大な社会的、技術的、環境的、健康的、軍事的リスクを伴う。よって今日の観点からすると人類のエネルギー供給の過渡的解決ではない。

カトリック教会の動き

「原子力を評価するための_____」

・ 「最終処分の問題が未解決であること、また大きな災害やテロ攻撃をうける[ことが甚大な被害をもたらす]可能性から、このエネルギー供給法は今日の観点からは倫理的に正当化できない。」（カトリック司教協議会『被造物に責任を負う—持続可能なエネルギー使用のために：持続可能なエネルギー供給の倫理的基礎に関する専門家文書』2011）

※2011年の福島事故後に発表されたが、すでにそれ以前から準備されていた。

プロテスタント教会の動き

- 1998年「ドイツ福音教会」(EKD)脱原発を要求する総会決議
- 2006年から2010年：原発利用の長期化に反対する見解をくりかえし表明

例：2008年の総会決議「原子力は気候保護への責任のある貢献ではなく、エネルギー供給に必要な転換を妨げる」として、原子力利用が、再生可能エネルギーへの移行までの橋渡しに有効であるという、_____に反対。

5. 脱原発・エネルギー転換に 教会の果たした役割

- 目先の_____や_____ではない視点
- 社会の_____の支持

背景：1970年代からの_____の蓄積

※ドイツ社会の中で原発をめぐる議論に関して教会が必ずしも先導的な役割を果たしたわけではない。むしろ社会のなかで原発に関する疑問が提起される一環として教会もこの問題にとりくむようになったとみられる。しかし教会が原発に批判的な姿勢を打ち出したことは、脱原発論が保守層を含む社会各層に広がることに一定の寄与をしたと考えられる。

6. 日本への問い

(表面的には)技術の「専門家」主導、(当面の)経済重視の日本との対比

- ▶ドイツ人は現実をみない理想主義者？ (三好2015)
- ▶ドイツは日本にとって参考になる？ (吉田 2015)

※いずれも倫理委員会およびキリスト教の要素に言及している

文献

- 木村護郎クリストフ(2011)「被造物への責任から—ドイツの教会は原子力とどのように向きあってきたのか」新教出版社編集部編『原発とキリスト教』新教出版社、136-148
- (2012)「キリスト教と原発—ドイツの事例から」『地球システム・倫理学会会報』第7号、113-118
- (2013)「なぜエネルギー問題が信仰(者)の課題となるのか—チェルノブイリ後のドイツとフクシマ後の日本—」『キリスト教と文化』第11号、13-19
- (2015a)「キリスト教(徒)は原発とどのように向き合うのか—環境神学の思想と実践から—」<https://re3buildicu.wordpress.com/2015/04/22/nuclear-energy-christian-faith-environmental-theology/>
- (2015b)「ドイツ福音教会信徒大会における環境問題への取組み」『キリスト教と文化』第13号、155-161
- (2016)「キリスト教会はなぜ、そしてどのように環境問題に関わろうとするのか—ドイツの事例から」『上智ヨーロッパ研究』第8号、43-59
- R. シュペーマン(山脇直司・辻麻衣子訳)(2012)『原子力時代の罫り—「後は野となれ山となれ」でメルトダウン』知泉書館
- 三好範英(2015)『ドイツリスク 「夢見る政治」が引き起こす混乱』光文社新書
- 山村(関)陽子(2013)「科学技術と<農>—東日本大震災を経て」総合人間科学会編『3. 11を総合人間学から考える』学文社、24-29
- 吉田文和(2015)『ドイツの挑戦 エネルギー大転換の日独比較』日本評論社